ISSN 2759-5404

OMNIA VINCIMVS FRVCTV INTER FOLIVM VERO!

もっと源流へ、
もっと本質へ！

哲学文化塾機関誌「フィロカルチャー」略して改め

フィロカル

14号
Spring
2025

㊟特集 価値

©U.NAWO

伊藤博章　U. なを　モカ　今道友昭　佐藤二葉　たぬ屋　みむらりえ　綺蝶レナ　濵賢

VOL. XIV

哲学文化塾
utibiles sophiamque cano non arma uirmque

Contents

㊙特集 価値

第13回「わが哲学を語る」を語り継ぐために

命より尊いもの ――価値と尊厳―― 伊藤博章 03

価値と幻影 ――「概念創造」と「価値生成」の裏側―― モカ×ハマケン 07

❖ 佐藤二葉のギリシア悲劇の声を探して6
ソポクレース『エーレクトラー』 佐藤二葉 12

❖ 私だけの価値はどこに たぬ屋 15

❖ 場末の V 系哲学 その2 “値”
価値とは 綺蝶レナ 18

❖ ムネーモシュネーの会と雑誌『ムネーモシュネー』7
詩人 水原昇 後編 みむらりえ 21

❖ 価値の心理学 今道友昭 25

❖ 第14回 美は輝きだ
価値――それがどうした！ 濵賢 27

★フィロカル(誌名)語義講釈：「フィロ」はギリシャ語「フィロー（愛する，好む）」，「カル」はカタカナ日本語「カルチャー」の略。造語的にはフィロソフィー（賢さを好む）やフィロロジー（言葉を好む）のように，ギリシャ語由来の語同士（同じ言語同士）を組み合わせるのが筋である。culture はラテン語 colo（耕す，手入れする，飾る，尊重する）の受動の完了分詞 cultus（耕された，手入れされた，洗練された，上品な）由来の言葉。したがって，フィロカルチャー略してフィロカル（洗練されたものを好む）はギリシャ語とラテン語という異なる言語の組み合わせなので，少々インチキでもある。語学的，形式的造語視点から大雑把にいえば，フィロ＋目的語が建前で，目的語が母音または h から始まる場合に限り，フィル＋目的語となる。例えば，philanthropy（フィランスロピー〔博愛，人好き〕），philharmony（フィルハーモニー〔交響楽団，和音好き〕），philhellene（フィルヘレネー〔ギリシャ好き〕）など。要するに，母音の連続や子音続きという不細工さを回避している。これが「フィルソフィー」や「フィルロジー」，「フィルカルチャー」とはならない理由である。ということで今後とも『フィロカル』をよろしくお願い申し上げる次第である。

☞カバー・イラスト☆作家プロフィール
u.なを（u.nawo）
1997年和歌山県生まれ．大阪芸術短期大学部修了（2019年）．2018年「日中交流作品展」（上海），「学生作品オークション展」（あべのハルカス・大阪）．
⊙ SNS → *X*（*Twitter*）：@uw_nawo，*Instagram*：@nawo_u，*Bluesky*：@u-nawo.bsky.social

小特集 価値

第13回 今道友信メモリアル
「わが哲学を語る」を語り継ぐために

命より尊いもの――価値と尊厳――

文・伊藤博章
日本美容専門学校講師

愛と価値

今道は価値について、様々な側面から論じている。そのような今道の価値思想の一端を紹介する。

『愛について』という愛を論じる本を今道は著したが、その巻頭で「価値の背後に、それをさえる力、実現する力として愛が必要なことはいうまでもない」と述べている。

「愛」という言葉を聞くと、親密な人間関係における感情に限定される意味合いが強いので、愛について論じるとき、このように価値が語られると、少し違和感を覚える。

しかし、そのように愛を人間関係に限定することは愛の実相を捉えないと今道は考え、愛には「愛しいと思う」と「大切であると思う」という二つの側面があり、愛は「人間が最も大切にする存在に対して、これを慕い憧れる気持」と定義する。

この定義によると、価値と愛とが密接に関連することは理解できる。「価値を愛する」という表現は大仰に響くが、「価値を大切にする」は自然である。「価値あるもの」と「大切なもの」は同義的に聞こえる。

愛が価値を支え、実現する力であることは、価値が愛という人間の主体的・能動的関与において存立することを示唆する。今道は「価値の実存的変動」という概念を考えた。価値の実存的変動とは「実存的関心によって、日常性に於ける等価的併存の境位に価値論的変化が生じる」ことである。今道は、自分が専攻する学問を選択する場合を、その例としている。

日常的には大学に設置されている種々の学問は、等価的に並存する。しかし、自分が専攻することを決めるという実存的決断が迫られるとき、「価値論的変化」が生じ、専攻すべき学問が他の学問に比べ価値あるものとして決まる。

したがって「実存が価値決定者なのではないか。存在者には類種的分類が明らかにする存在論的差異があるが、それらは価値としては等価であり、個的実存によってはじめて価値論的差異を示す」と述べている。

愛と実存的関心との関係については今道は言及していないが、愛のない実存的関心はあっても、実存的関心のない愛は存在しないだろう。

価値は存在を超越する

人間の生は、愛や実存的関心のうちに営まれ、そこにおいて価値論的差異が示されて、価値が存立する。このことは、今道が常に説いていた、プラトンの言う「よく生きる」の意義に関係する。

「よく生きること」を今道は「価値的生」と呼んだ。価値的生とは何らかの価値を実現するために生きることである。人間の生は「ただ生きる」という自然的生とは異なる価値的生であり、今道は価値的生の意義を強く説いた。

だが、これに対して、ただ生きることに価値はないのか、生への畏敬を軽んじていないか、と思う人も多いだろう。

今道も、命が至上の価値であることは認める。しかし、この至上の価値である命をもささげることにより実現する「最高の価値」があると考えている。

今道は、戦争においてあまりにも命が軽んじられたことへの反省より、戦後の日本において命が至上の価値とされたことは是とするが、その一方で、それが孕む問題性を問い掛け、その命をもささげる価値の尊さを説いた。

罪を犯して生き抜き、自分の命を守り通すことが素晴らしいことではなく、抑圧のない自由な社会の実現に献身し、命を犠牲にすることの尊さを忘れてはならないと言う。

このように、今道は価値を愛と命との関係性において論じる。そして、この関係性を先鋭化して次のように述べる。

> 愛が命を捨てさせる。愛する者を守るために死に赴くことを、恋人や友人や親や子はあえて辞さないのではないか。人間は愛する者の存在を守るために自分の存在をささげようとすることがある。……しかし、それは他者の存在のためではなく、自己の愛する他者の存在のためであり、命をささげるのは愛のためなのである。……広い意味で愛を解せば、大切に思うことであるから、あるものの価値を認め、それに引かれ、大切にすることである。したがって、愛のために死ぬとは、価値のために存在をささげることであり、価値を存在に優先させることである（『新版　美について考えるために』、二五三ページ）。

ここでは、命をささげることを端的に「死ぬ」ことと表現しているが、命を「耐えて生き貫く果ての死までの生涯」と捉えると、フランスの諺（ことわざ）にあるように「愛することは少しずつ死ぬことである」という意味の死も含意される。

命という存在を価値のためにささげることは、存在よりも価値を優先させることであり、「優先させること」は「超えていること」を意味すると解して、今道は「価値は存在を超越する」と考えていく。これが今道の価値思想の基礎であろう。

目的性と理想、理念

人間の生は、価値的生として動物の生から区別されるが、さらに今道は人間の生を動物の生から、目的性と合目的性に着目して区別している。「合目的性」とは、動物の生が本能的に目的が決定されており、新たな定立される目的に対して閉じられていることを意味する。

したがって機械も合目的性において作動するといえる。このような合目的性に対し、限定された目的に閉ざされず、自由に目的を定立できることが「目的性」である。

人間は目的性において生きるが、ルーティンの生活を行う限り、合目的性において生きている。だがこの合目的性は、動物や機械の合目的性とは異なり、破ることができる。ルーティンの生活は自由に破ることが可能である。もし可能でなければ「奴隷」であろう。

このような目的性にある価値的生は、価値を目的として自由に定立する生ともいえる。目的となる価値は理想である。

今道の解釈によると、理想（idea）は、真・善・美などの超越的な理念（idea　理念的価値、価値理念）の影である。「理念はその影を、意識内の概念よりも上方の部分に、意識の尖端に、投射して、そこに理想を形成する」と述べている。

今道はこのことを「価値理念を思い見る」あるいは「価値を発見する」と表現する。

価値の創造と発見

理想は経験的世界において実現されるが、理念は経験的世界を超越しており、経験されることはない。

だが、「思い見る」・「発見」という言葉が示すように、理念は「見る」対象と理解されている。

今道は、理念は「理性の内部に輝くもの」と言い、また、「自己の知性的に直観するところの理念」と述べており、感性的な直観とは別に知性的な直観を認める。

さらに「自己の理性が原理としての理念を自己の内に見るその見方が自由な道の創造」に関係すると言う。「自由な道の創造」とは人生の道を自ら自由に創造して歩むことを意味する。「見る見方」をパースペクティブと捉えると、超越的で永遠に変わることのない理念を思い見るパースペクティブが変わることにより、新たな道の創造が可能になるということが読み取れる。自由に目的として理想を定立することは、自らの生き方を創造していくことである。

その創造は、理念を理性的に「思い見る・発見する」、その見方・パースペクティブにおいて可能になる。

このような理念を思い見るパースペクティブにおける価値の発見は、価値の多様性や歴史的変遷を説明するであろう。

ところが、さらに今道は「価値の創造」についても言及する。「価値の発見」と「価値の創造」の関係性をどのように考えていたのかは、よく分からない。

いずれにせよ、今道は歴史的変遷の彼方(かなた)にある超越的な価値理念を認めると同時に、価値の歴史的変遷としての価値の発見と価値の創造を認めており、自らが構想した新しい倫理学であるエコエティカ※を、一つの価値の創造と捉えていた。

美と自己犠牲

理想的価値が目的となるのに対して、その価値を実現する行為は手段である。今道は目的となる価値を論じる一方で、行為という手段の価値の意義を考え、目的を達成する手段である行為が有する美的価値を論じた。

今道の美学では、目的を実現する行為における自己犠牲の大きさの程度に着目して、「正しい行為」「善い行為」「美しい行為」が区別される。最も自己犠牲の大きい行為が美しい行為とされ、美が正義や善よりも高い「最高の価値」となる。

行為の美は、「どのように行なうか」という手段選択に関わる価値である。

したがって、悪とされる目的を達成する行いも、それが自己犠牲の行いである限り、美しい行為となってしまう。

それゆえに今道は、目的が悪であっても、それを実現する手段の自己犠牲という形式において、美の価値が存立すると論じる。

ただし、これは「行為における目的の絶対性」への警告であり、「目的が手段を正当化する」ことに対するアンチテーゼである。反価値の目的を定立することを是認するものではない。

そのため、今道はアリストテレスが「美しい死」と考える戦死を容認しない。

アリストテレスが、戦死における犠牲的行為が美であると考えることは正しいとするが、その死がポリスという共同体のための自己犠牲である点を問題にする。

ポリスの価値を目的とする自己犠牲の死を今道が認めないのは、そこでは、実存的個人に内在する価値、尊厳が否定されているからである。

その一方で今道は、哲学者アムロンが、溺れる青年を救うために自らの命を犠牲にしたことを美しい行いとして尊び、しばしば言及していた。

アリストテレスが述べる戦死もアムロンの死も、自己犠牲という行為形式が同じであるのに、アムロンの美しい死が尊いものとされるのは、その行為が尊厳ある他者に対する実存的応答の行為であるからであろう。

今道が美しい行いの例として言及する逸話では、労苦の自己犠牲を厭(いと)わず他者を助ける行為が描かれるが、同時に助けられる他者の人としての尊厳を慮(おもんぱか)る思いやりの尊さが説かれている。

既に述べたように、今道はプラトンの「よく生きる」ことの意義を説いていたが、そこに潜む限界も示唆している。プラトンを含むギリシア哲学は個の尊厳を否定する奴隷制を容認する社会を打破することはできなかった。

※エコエティカ　エコはギリシア語のオイコスに由来し、狭義には家、広義には生活圏をいう。エティカはエーティコスに由来し、道徳的な・倫理的な〈こと〉を意味する〈ラテン語ではモーラーリス〉。つまりエコエティカとは人類の活動圏における倫理の意味で、具体的には、現代社会が必要とする倫理を考え、議論することである。

個の尊厳とペルソナ（persona）

今道は「個の尊厳」という言葉は用いていないが、思想史的に、国際人権宣言などで謳われる「個の尊厳」の淵源となる「ペルソナの価値」について論じて次のように言う。

> ペルソナという人間の人間としてのこの世の生命より尊い価値のために、人間は自己の一回限りの肉体的生命を献げなければならないことがある。それこそがキリスト教的生の行為の極限である（『超越への指標』四六八ページ）。

ここで論じられるのは、理念に基づく「価値的生」とは異なる、ペルソナの価値に基づく「キリスト教的生」である。

ペルソナはキリスト教を起源とする概念であり、今道はペルソナを「世界における最も貴重なるもの」と表現する場合がある。

この表現は、トマス・アクィナスが言った「ペルソナは自然における最も完成されたものである」を想起させるが、このトマスの考え方は現代では「尊厳」を意味するものと解釈されている。

それを参考にすると、今道の言う「尊い価値」は「尊厳」を意味すると解釈することは許されよう。

現代において、ペルソナ概念はもはやキリスト教特有のものではない。だが、ペルソナの概念はキリスト教に由来するために、キリスト教の神学的次元が失われれば、ペルソナの概念も消滅してしまう可能性があると考える哲学者もいる。今道も同様に考えているのか、ここではペルソナを神学的次元において語り、「この世の生命より尊い価値」と「キリスト教的生」に言及する。

「よく生きる」という価値的生においては、価値は命の存在を超越するものであった。また、キリスト教的生においては、ペルソナの価値（尊厳）はこの世の命の価値よりも尊いものとされる。

今道は尊厳を否定する価値を認めない。そのため、ペルソナの価値を否定するような自己犠牲（アリストテレスの戦死）の美を今道は認めない。だが、尊厳は価値の否定においても認められる。

だから、善の価値が認められない人間にも、その尊厳は守られる。悪人だからといって「奴隷」扱いすることは許されない、「人」として扱われるだろう。

現代の人権思想は神学次元とは別に尊厳を説明するだろうが、今道は神学的次元のペルソナから説明する。価値が理念の超越から考えられるのに対して、尊厳はペルソナの神の超越から考えられているともいえる。今道の価値思想では、この二つの超越を背景に、命より尊いもの、価値と尊厳が考えられた。

（いとう・ひろあき　倫理学）

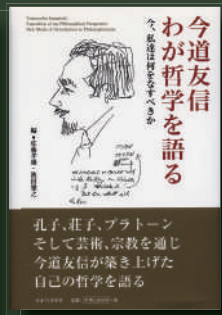
今道友信（いまみちとものぶ）　東京大学名誉教授，清泉女子大学名誉博士，日本アスペン研究所特別顧問，日本美容専門学校名誉校長．

◎略　歴

1922年ー2012年．東京生まれ，東京大学文学部哲学科卒業，パリ大学（研究員），ヴュルツブルク大学非常勤講師，九州大学助教授，東京大学教授，国際美学会副会長，哲学美学比較研究国際センター所長，放送大学教授，清泉女子大学教授，副学長，紫綬褒章受賞，勲三等旭日中綬章受賞，第25回マルコ・ポーロ賞受賞，第19回和辻哲郎文化賞受賞．

『愛について』（中央公論新社，2001年）．

『新版　美について考えるために』（ビナケス出版，2024年）．



『今道友信　わが哲学を語る』（かまくら春秋社，2010年）．

価値と幻影

―「概念創造」と「価値生成」の裏側―

Text by hamacken

価値の前口上

大雑把にいえば、まず何か目的のための手段として有益だという価値（相対的外在的価値）がある。金になるとか、名誉なこととか、ステータス自慢ができるとか、幸福になれるとか。そして次にそれ自体が無条件にどこまでも好ましく、輝きの極みのようなえも言われぬやんごとなき価値（絶対的本質的価値）がある（とされてきた。幸福、愛、善、真、美、仁など）。

両価値のブレンド具合というか、連鎖、パラメーター次第で、価値は、多種多様、様々な様相を呈しつつ、世の中のニーズに合わせて臨機応変に自らの存在価値を開示（主張？）してきたようだ。つまり、価値の正体は概念（でしかなく）、実体は、関数のように定まることなく（都合よく）様々な値を取る、人間社会というよどみに浮かぶうたかたのごとき存在ある。

さて、分かったような理屈はこの辺にして、実践的価値プランナーというか、価値の編集者のようなモカさんに久々に（七年振り）、忌憚（きたん）なく語ってもらったので、耳を傾けながら、皆様、様々に価値について思いめぐらせ、機会があれば、言葉にしてほしい。思索・哲学・文学研究に正解はない（言った者、思った者勝ちである。逆にあれば困る）。

構成＝モカ（UNI代表）×ハマケン（編集隊長）
制作協力・株式会社UNI

私の感じる価値概念

話・モカ

はじめに

価値は何かを感じたときや新しいコンセプトが出来たときに生まれるような気がします。

信頼、期待値、希少価値、利便性、思い入れ……。実体はないものの、ある概念が高価でありうることを認識すること、価値を生むこともできます。この価値に成熟するほど、価値持ち、お金持ち、つまり裕福になれます。

そういう価値をうまく扱えたとき、自分自身を詐欺師だなと思います。

しかし騙(だま)しているようで、後から価値が付いて高価になることもあるので、私はその期待値を集めて、価値を育て、生計を立てていると思っています。

価値のエレメント

外在的な価値（換金可能な価値）と本質的な価値（換金不可能な価値）は同じもののような気ががするんです。どういう視点から見ているかの違いでしかなく、つまり本質的な価値も含めて相対化できるのではないでしょうか。

分かりやすいお話をすると、最近猫を飼い始めました。ペットは商品なのでショップでは値段が付いていますが、私が飼うことで私にとっては掛け替えのない、お金に換算することが不可能な価値ある存在になりました。

価値の換算が簡単ではなくても、ある人にとっての好みや個人的な思い入れだったり、一般的には、その時代の流行や市場での希少性だったり、いろんな要因で自然に価値の優劣、序列も決まります。

自然に生じる価値も人為的に誰かによって作られる（例えば、芸術作品）価値も広い意味では、どちらも自然の営みとして捉えることもできます。

接点を探る

プログラミングは芸術活動だと思うことがあって、特に、自分だけが気に入って、それがすばらしく、とても価値があると思えるコードだけを書

VIBES NIGHT とのコラボで復活したプロパガンダ。「集まることに価値があり、集まれば集まるほど、価値は高まり、しかも600人以上の女装さんたちが集まる場になったのはすごいこと」（モカ）。そこは日常から離脱したファンタジックなアート世界。

いていたいけれど、それでけではテスト・データも得られないし、持ち出しばかりで、継続も難しくなります。

そこでビジネスに乗せることを考えます。ユーザーを増やして、利益の確保ができるように。

それができると、さらに大きな材料、たくさんのリソースを使って、もっとクリエイティブなことが実現でき、価値も高まります。ただ、ビジネスに乗せやすくても、自分がやりたくないことや個人的に価値を見いだせないことは、ニーズがあってもやらないようにしています。

自分だけの価値と社会のニーズとの接点や境界線を探りながら、自分だけの価値だったものを社会の価値にしていければと思います。

リアルの価値

同じ労力を使って、同じサービスを提供しているはずなのに、提供される側からすると、価値は必ずしも同じではないということがあります。

コロナの渦中に新宿のお店「女の子クラブ」をオン・ラインで営業したことがありました。

労力という点では同等、むしろ配信の手間が加わります。そしてユーザー（お客さん）からすると、新宿まで出掛ける手間も省けるのですが、リアルなお店での通常営業と同じ料金設定だと高いと感じるかたが多く、これはリアルの良さが価値を生んでいる事例といえそうです。

ホスピタリティの高さが生む価値

モノではなく、リアルな人間によるサービスや労力が価値高める事例として、同じサービス、つまり同じ素材、例えば同じ産地の同じトマトを使って、同じサラダを出すとしましょう。

それをAIがほぼ完璧に行ったとしても、人間が労力を使って、さらに気配りや紳士的な対応で、優れたホスピタリティをもって行ったほうが価値は格段に高まります。なので価値を高めるために、同じものを提供する場合でも、故意に手間をかけることもあります。

こういったことはAIが取って代わりにくい仕事の一つで「女の子クラブ」でも実際に行いました。それによってサービスを受ける側の満足度がアップし、そこに幸福感が得られるからです。人に何かしてもらうことで得られる幸福感は余裕のある層の人たちに顕著に見られる傾向で、誰でもやはり幸福という価値を求めているといえるでしょう。

生きる意味は幸福という価値

一人一人が生きる意味は「幸せになること」で「幸せに生きること」に、この世界すべてにつながる意味があると思っています。

これは極論ですが、宇宙全体と比較すると人

間はとても小さな存在です。そんな小さな人間が何をしようが、宇宙全体から見れば、無に等しいともいえます。

その意味で究極のところ、生きている意味はないのかもしれません。「お悩み相談」を行っていたときに、時々「生きる意味が分からない」という相談を受けることがありました。そんなときには「まず主観的に自分が『幸せだ』と思える時間をたくさん作ること。死ぬのはそういう人生を歩んだ後でも全然遅くないんじゃないですか」と答えていました。

スクールカースト

イイネの数や再生回数がスクールカーストにすごく影響するんです。スクールカーストで一軍になる、あるいは一軍で居続けることがある種本質的な価値になっていて、例えば、そのための手段としての外在的な価値になっているのが、イイネの数や投稿動画の再生回数の多さです。特に自分の描いた絵がバズったりすると、いきなり人気者になってカースト上位に立つことができたり、またその逆もあります。バズれないのは、みんなの望む価値を理解していないとか流行の空気を読めていないからだと思われたりもします。（モカ）

語義コラム「哲学的価値論」

本誌は一応、哲学寄りの教養誌なので（エンタメ志向ではあるが）、価値を論じる以上、価値論の語義について簡単に一瞥（チラミ）しておこう。value, worth, merit…まだまだありそうだが、現代社会＝経済社会では、value が好まれるようで、価値論は Theory of Value である（直訳ロッカー王様バリにマンマでもはや潔い）。そしてこの value は銭金（ゼニカネ）と思ってほぼ間違いない。やんごとなき価値でないほうの相対的外在的価値に属する。しかし崇高なる気高き哲学界では、そのような value のごとき世俗的且つはしたない言葉は忌避され、価値論はアクシオロジー（Axiology ἀξίος + λόγος + -ία）と勿体（もったい）を付けていわれるのが習いである。何となく威厳有り気に思わせる哲学あるある手法、すなわちギリシャ語語源造語術である（一方、やたら抽象性に富む漢語的造語術もある）。アクシオス（「価値のある（釣り合っている）」意味の形容詞。ロゴスが男性名詞なので男性形）＋ロゴス（言葉、理屈、学）＋イア（抽象化する末尾）である。哲学はある種の文学でもあるので、こうした言葉遊びも楽しみたい。というか、大人なら、寛大なる心でぬるく優しく見守ろうではないか。（ハマケン）

……価値を
うまく扱えたとき
自分自身を
詐欺師だなと思います
しかし
騙しているようで、
後から価値が付いて
高価になることもあり……
……価値を生んで生計を
立てていると思っています

↑「女装村マッチーズ」のサイトより。モカさんがAIと対話しながら、構築したサービス・サイト。女性男性を問わず、さらに女装さんでなくても利用できるらしい。詳細はウェブサイトで。
https://matches.uni-web.jp

↑12周年を迎えた「女の子クラブ」。店名とは裏腹に、女の子ではなく、男の娘が在籍。詳細はウェブサイトで。
https://girls-club.jp

『12階から飛び降りて一度死んだ私が伝えたいこと』(高野真吾との共著, 光文社, 2019年).

『迷いうさこの感じる哲学漫画』(ビナケス出版, 2016年).

モカ 株式会社UNI代表(https://uni-web.jp)。女装サロンバー「女の子クラブ」(上段㊨写真参照)、サービスを売る人と買う人をつなぐ「女装村マッチーズ」(上段㊧写真参照)をプロデュース。また今年復活再開した日本最大の女装イベント「プロパガンダ」(八ページ下段写真参照)の創設者である。男性として生まれ、性転換手術後、戸籍を女性に変更。二〇一五年、一二階から飛び降り自殺を図るが、車上に落ち、奇跡的に、後遺症もなく一命を取りとめた。著書に『迷いうさこの感じる哲学漫画』、共著に『12階から飛び降りて一度死んだ私が伝えたいこと』などがある。詳細は、Ⓦウィキ参照「モカ(経営者)」で検索。

佐藤二葉のギリシア悲劇の声を探して 6

じゃあ、あの人は生きているの？この私が生きている限りはね。

ソポクレース『エーレクトラー』

私は漫画を描く仕事をしている。ここ数年精魂込めて制作していたフルカラー歴史漫画『アンナ・コムネナ』（星海社、二〇二一－二〇二五年）を先日描き終え、最終巻が発売されて一段落したところである。本作はビザンツ帝国（東ローマ帝国）のコムネノス朝の皇女として生まれ、西洋において古代から中世にかけてただ一人の女性歴史家となり、ビザンツ帝国千年の歴史の中で最高傑作ともいわれる歴史書を書いた女性の人生に取材したものである。

歴史に取材した物語というのは、読者にとって結末が分かる（という前提の）物語なので、「作劇のお手本はギリシア悲劇」です、と本作に関する取材や講演会などでたびたび言ってきた。

ギリシア悲劇の取材元は観客たちが所属する共同体で共有されている物語（神話・歴史）であり、既知の物語を、その時の社会と呼応し、その時の座組でどう料理して上演するのかがギリシア悲劇というジャンルの面白さだと思っている。

そういう点で、歴史を題材に物語を作るうえでギリシア悲劇はこれ以上ない道しるべとなった。最終巻の中盤、全ギリシア悲劇好き作家のあこがれである（と私が勝手に思っている）アナグノーリシス（認知）→ペリペテイア（逆転）のコンボを決めることができ、一巻からずっと計画していた仕組みを発動させられたことを密かに喜んでいた。

当然、読者はギリシア悲劇に思い入れのない方々がほとんどなので自己満足といえばそうなのだが、サイン会で直接うかがった感想やいただいたファンレターから、現代の読者にもなかなか効果がある作劇の仕方なのだと感じた。

実際にそのアナグノーリシス（認知）→ペリペテイア（逆転）の連鎖を展開に入れてみて、「こうなるしかないでしょ！」という展開を作ることの難しさを知った。ある時点までは真実が明るみに出ないための自然な理由、各登場人物の感情の流れや状態、緊張感を調節してある一点に集約させて「認知」を起こし、様々なものをかみ合わせる必要がある。

具体的にオマージュを捧げたのはエウリーピデース『エーレクトラー』なのだが（否認からの傷跡による認知であるとか、姉→弟をひっくり返して弟→姉の認知にするとかいうことをしています。

ご興味のある方は『アンナ・コムネナ』六巻をお手に取ってみてください）、今回、この連載ではソポクレースの『エーレクトラー』について話したい。というのは、この作品の認知→逆転のシーンの印象が、私とギリシア悲劇との付き合い方を決めてしまったからである。

ソポクレース『エーレクトラー』は、先行するアイスキュロス「オレステイア三部作」と同じ題材で、父親アガメムノーンの仇討ちを神アポローンに命じられた王子オレステースの復讐の神話がベースである。

王宮で虐待に耐えている王女エーレクトラーは、亡命し生き別れになった弟オレステースを待ち続けるが、ある旅人から弟の死を知らされる。しかし実はその旅人こそ、父の復讐のために帰ってきた弟であると知り、再会した姉弟は復讐へと舵を切っていく。

この、弟の死を知らされて絶望する姉エーレクトラーに弟オレステースが正体を明かし（アナグノーリシス）、一気に絶望から歓喜へとエーレクトラーの感情そして状況が逆転（ペリペテイア）するシーンだが、弟が死んだと思っているエーレクトラーの嘆きをじっくり味わえる作りになっている。

弟の骨壺（だと思っているもの）を抱いての長台詞は四〇行以上あり、その台詞を聞いて彼女が姉であると確信したオレステースが正体をはっきり明かすまでにさらに五〇行ある。

じゃあ、あの人は生きているの？　この私が生きている限りはね。　（一二二行）

姉弟は抱きしめあい再会を喜ぶわけだが、これほどに焦らすものか、と感じる。このオレステースの台詞もなんだかオシャレで余裕がある感じだ。

目の前の女性が姉であるとすでに確信しているにもかかわらず、すぐに正体を明かさず台詞の応酬を行うオレステースには、なにか嗜虐的なものすら感じるのだが、この仄暗い喜び――苦難の中にある人間を見る喜びは、観客の（私の）願望なのだろう。

『オイディプース王』と出会って「ギリシア悲劇って面白い！　最高！」と思っていた私は、次に手に取ったこの『エーレクトラー』で、このサディスティックな喜びを見出してしまった。

苦難の中にあるオイディプース王の姿から人間という存在のみじめさと気高さを同時に感じて崇高な気持ちになったが、エーレクトラーの悲嘆からはなにか甘美なものを味わったのだ。「ギリシア悲劇ってこういう面白さもあるんだな……」と、図書館の中で陶然としていたのを思い出す。こういうものを私も作りたい――そう思ったかもしれない。

実際に登場人物が隠れていた真実を認識状況が逆転するシーンを組み立てようとすると、前述のとおり、複数の登場人物の感情と行動の流れを調節してその一点に集約し爆発させる必要があり、なかなか難しい。

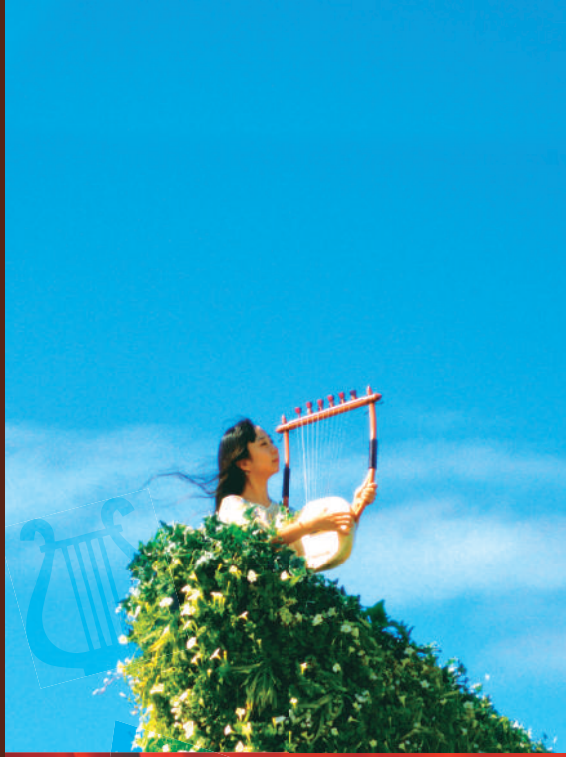
しかしソポクレースの『エーレクトラー』の場合、上記のように観客をじらす余裕を感じる。自分が死んだと思って嘆き悲しむ姉を目の当たりするオレステースの態度には、ホメーロスの描く神々のような超然としたものすら感じるが、同時に悲劇詩人の余裕も感じられる。

エーレクトラーとオレステースのやり取りを見る私たちは、エーレクトラーの感じる苦痛と絶望を味わうと同時に、オレステースの側、あるいはそれを見下ろす神々の側に立って、苦しむ人間を眺める喜びをも味わえる。

近世の劇のように、複数のサブプロットが絡み合うような作りではなく、一本筋の堅牢なプロットの作劇であるにもかかわらず、多重的な見方・味わい方ができる。

それは、既知の物語を題材に作られているというギリシア悲劇の特徴が可能にしているものなのかもしれないが、同時に、それを最大限に

佐藤二葉（さとう・ふたば）
俳優・演出家・古代ギリシア音楽家・作家.
北海道出身．作品：『百島王国物語』,
『うたえ！エーリンナ』など.



X（旧Twitter）: https://x.com/baccheuo

使いこなす悲劇詩人たちの腕のためでもあろう。早くこの境地に辿り着きたい。

二五〇〇年前のギリシア悲劇から、みんな「知っている」物語をどう演出・提示するか、というかなり高度な形で私たちの物語芸術は発展していったが、二一世紀の現在、歴史漫画を描いていると「〝史実〟と違う！」というお叱りを受けることがある。ちなみにほとんどの場合、原文はもちろん邦訳や英訳のある史資料にあたっていない方が多く、インターネット上の不確かな情報を〝史実〟として非難される（その非難されている部分は史料上の叙述をもとに作劇していることも多い）。

悲劇詩人たちも「知っている神話と違う！」というように観客から非難されたことがあっただろうか、と想像するのだが（エウリーピデースの場合はありえそう）、ソポクレースの場合、あまりその隙を感じない。繰り返すが、早くこの境地に辿り着きたい！

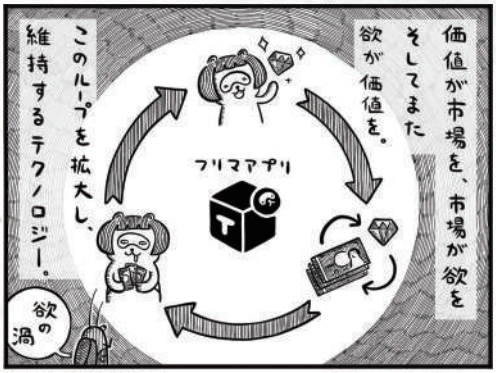
◎佐藤二葉の最新刊
『アンナ・コムネナ ⑥』
星海社 COMICS,
B6，128ページ

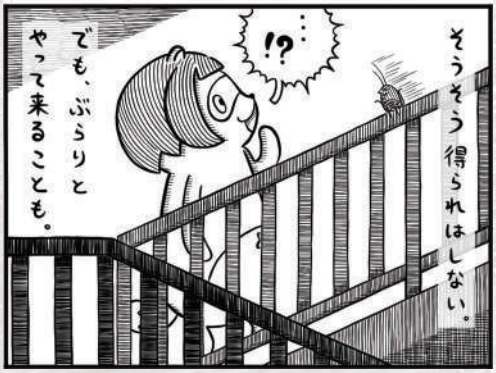
西洋中世唯一の女性歴史家、
ビザンツ皇女アンナ・コムネナの
数奇な運命を鮮やかに描く！
シリーズ全八巻、完結！

私だけの価値はどこに

おいしいものが食べたい、楽しく暮らしたいなどなど、日々、欲の尽きることのない私。その湧きあがる黒い泉のほとりにチラつくのが、価値の影……。

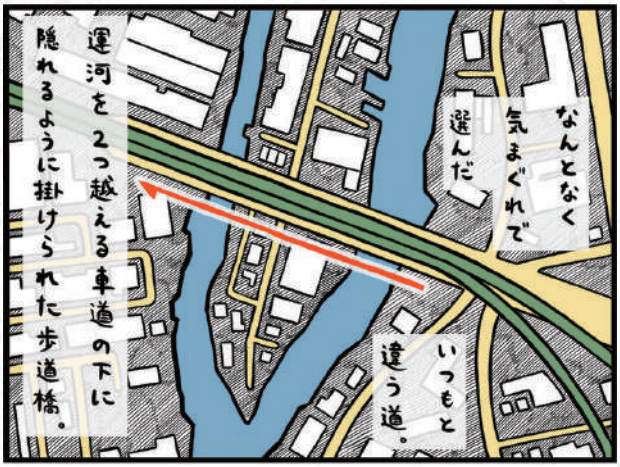
文・イラスト たぬ屋





とはいえ、あまりに欲が過ぎたり、どこまでも価値を追い求めたりすると、身を滅ぼしかねないことは、誰しも昔話でご存じのとおり。

ですから、我々は自重しているはずなのですが、近年はテクノロジーの発展により、そのタガが外れやすくなっているようにも思えます……。



結局、個人的価値もそれを得るためには「お金」やそれと同義語の「時間」が掛かります。

しかし、その先で換金できず、欲のループがストップするところに意味があるのではないでしょうか。

ただ、個人的であるが故に、似たり寄ったりの琴線を心に持っている方でないと、その価値を共有できないことは残念でなりません……。

そんな個人的価値はいくら欲したとしても、狙って得ることは難しいのですが「犬も歩けば棒に当たる」とは良く言ったものです。

より好ましい言葉を借りるなら新約聖書の「求めよ、さらば与えられん」と言ったところか。

この偶然は、私が親戚の家へ行く際、日ごろの運動不足を憂いてか、2駅手前で降りたところから始まっていたのでしょう……。

何事にも代えがたい発想のタネや感情の起伏が得られる、お金とは無縁の世界、個

人的価値。

得られた瞬間の満足感は、市場価値のある物品を手に入れた時と同程度かもしれませんが、違いはその持続力。

個人的価値はあまり減衰せず、ゆっくり心に沁み込むのです。

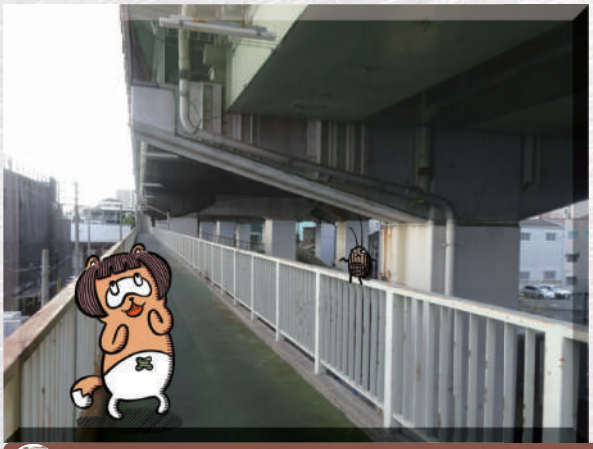
この関係は、栄養素の炭水化物と脂質の関係に似ているかもしれません。

エネルギー源として即効性のある炭水化物と貯蔵性に優れた脂質。

それぞれを補い合うこれらは、どちらが欠けても、どちらが過剰でも身体はうまく

回りません。

精神的なエネルギーの源として、即効性の市場価値と持続型の個人的価値をうまく魂にくべて、心の炎を絶やさぬようにしたいものです……。



場末のV系哲学
その❷ "値"――

価値とは

文・写真提供 綺蝶レナ
Lena Kicho

簡単に口にしている"価値"という言葉だが、そもそも実際の意味を諸君はご存知だろうか。

辞書を引くと、「価値／値打ちの共通する意味：その物が何かの役に立つ度合い」とある。

命

ぢゃあ生き物の価値とはなんだろうか。何かの役に立つ度合いにあるのだろうか。

人間は長い歴史の中で生き物の命を頂き生きている。植物や動物の命を喰らい、今世まで長らえている。または医療技術や科学によってともいえる。そんな人間が何かの役に立つ度合いに値するといえるのだろうか。

では人類が絶滅したら、地球の温暖化はなくなり、生き物たちもただの食物連鎖だけで調和を持って過ごせるのだろうか。

"命の価値"というのもまた嫌な言葉で、命の価値を決めることは人間がやっていい所業とは思えない難しい話。

価値について語るには余りにも膨大な時間と脳と心の容量が必要な気がしてくる。

例えばセンシティブな話だが自害については我が国は止める傾向にあるが、死刑制度は廃止になっていない。

命の価値を決める神のような人間もいるということだ。確かに罪を犯した者と犯してない者を比べるのは愚問ではあるが。

では、犯罪者の命に価値はないのか？

といわれるとそうともいえない。統計や研究の役に立つ場合もあるし、犯罪者にも家族がいた場合、たとえ極悪人でも家族にとっては「命」に違いないからだ。

命の価値を決める権利は、我々人間にあるのだろうか。古代から戦は数え切れぬほど起きてきた。戦場で戦士たちは目的のために己の命を懸けて戦い抜いた。彼らは戦う価値をどのように決めたのだろうか。命以上に大切なそれはなんなのだろう。

また、戦に巻き込まれた罪のない人間たちの命の価値は国にとってどの程度のものだったのだろうか。

遊女

遊廓（ゆうかく）があった数十年前（一九五八年まで）は何が遊女の価値を決めたのだろうか。

外見か、学か、貴賓があるのか、生まれか。

遊女たちは生まれの方言を隠すために廓詞（くるわことば）を使用したという。それは平等に接するようにしてほしいことから作られたという説がある。こ

れは生まれで価値が変わるからというのも一つの要因になるだろう。また遊女たちの価値を決める当時のお偉い方はどんな価値のある人だったんだろうか。

そして時は流れ、平和になったように見える今世の日本でさえ、自ら生きることをやめる者は多い。彼らにとって自分の価値、他の価値の判断基準はなんだったんだろう。

己の命の価値は己の絶望や哀しみよりも虚しいものだったのだろうか。その者の価値を理解し、尊重してくれる社会はなかったのだろうか。

金

では金の価値はどうだろうか。

金を稼いだ後に買う物の価値。むしろ価値のある物のためにお金を使う。これだけ働いてこれを買うことができたという満足のある価値なのか、金額が高いから安い物で我慢するかと物の価値と自分の使う用途の価値と一致させて買い物をするのだろうか。

逆に思ったより高い金額でも買う価値があるから無理してでも買うということもあるかもしれない。

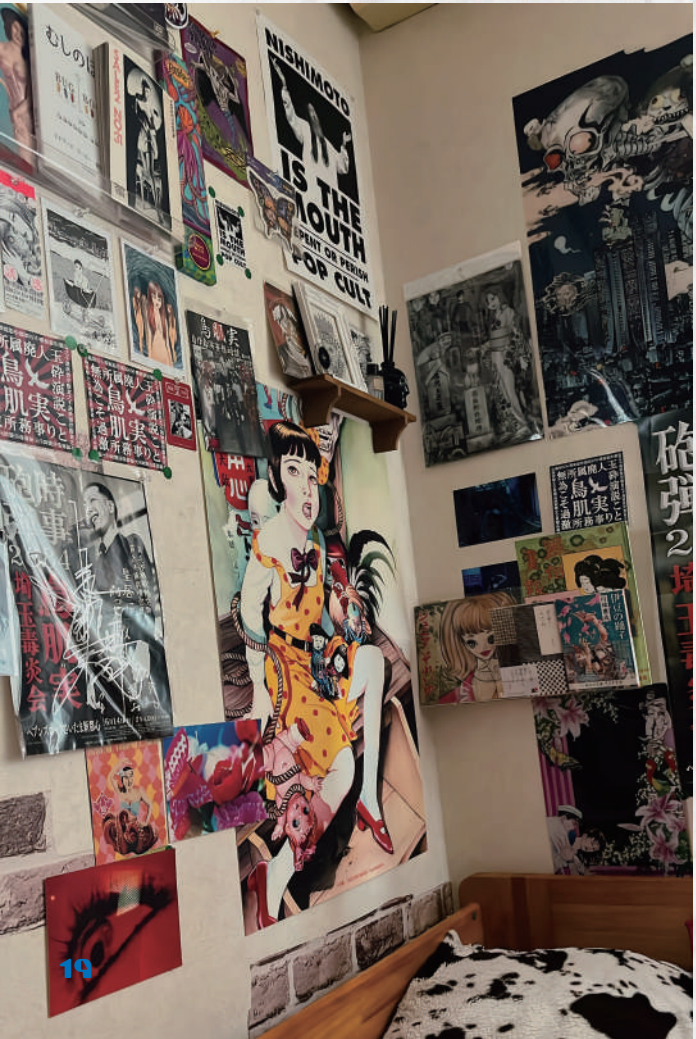
はたまた、金は使うものではなく、持っているということに価値があると思う者もいるのだろうか。

金そのものに価値があると思う者もいるだろう。また、金を持ってる自分に価値があると思う者、〝価値のために浪費する〟のか〝価値のために貯蓄する〟のか、色んな捉え方がお金にもある。

また本人には宝物に見えるコレクション（左写真参照）の価値は、他人からしたら屑なのかもしれない。

恋

この世界は凡ゆる価値のバランスでできている。価値観の違いと恋愛でもよく聞くが、たかが価値観の違いでしょ？　と思うのは如何なも



のか。価値観の違いによって、百年の恋も一時に冷めるものである。

例えば、自分がこの大福は世界的に売れる！と思ったとして、恋人が、所詮素人の味だと言えば、価値観の違いから恋も冷めるかもしれない。

連鎖

価値というのはこの世に溢れていて、全ての生き物に共通する共感であり、課題なのだ。

けれど自分には自分の価値がわからない。特別他者より優れてるとも思わないし、劣っているとも思わない、かといって普通？　と聞かれると困ってしまう。普通の価値ってなんだろうか？　一つ言えることは起こるべくして起こり、生まれるべくして生まれたものがこの地上にあり、ルールや価値の中で生きている。

起こるべくして起こったことについて悲しむことも恨むこともあるかもしれない。自分にもある。こんなの起こらなきゃいいのに！　意味がないのに！　と嘆くこともある。でもまたそれもある人にとっては何か価値のある出来事かもしれない。

自分の理解を超えた可能性の中で人間は思考を巡らせ、呼吸をして、脳と心で判断して、価値を生み出して、価値を受け取って、価値を渡して、生きているのだ。

前回の妖怪の話とは打って変わって生々しい人間の話になってしまったが、書きながら、今こうして生きていられることに、そして諸君と出会えたことに自分の価値や環境の価値の重みや有り難さを感じている。

ではまたどこかで。

（ハヒフ）

綺蝶レナ（きちょう・れな）
沖縄県出身のマルチ・タレント。
ライブやステージ・シンガーのほか，
ライター，妖怪をメインの画家
としても活動中。
@leeeena_lilgirl

詩人 水原昇 後編

ムネーモシュネーの会・主宰 みむら りえ

のん気にベートーヴェンのある曲を聴いていたら、『森のくまさん』に少し似ていることに気づいた。

気づいたとたん、私の頭の中で事あるごとに、

♪ある～日
♫森のなかぁ～
♪くまさんに～
♬出会ぁったぁ～ ※

というメロディが繰り返し鳴って、うんざりしていたちょうどその頃、編集隊長からメールが届いた。

メールには
「水原の締め、お願いします」
とあった。

……？　……！　忘れていたぁ！

と驚いたおかげで、森のくまさんはどこかに行ってくれた。その意味では、助かった。

だが「水原の締め」……そうだった。原稿の締め切り日を失念していた。

二〇二三年の夏頃から水原昇について書いているのに、一向に先に進まず、前編・後編の二回で終わるはずが、前編・中編に変更され、「続きは次号へ」という宣言によって停滞し、未だ終着点が見えないままである。

いくら何でも今回で締めなければならないという、いわば崖っぷち状態であることさえ、失念していたわけである。

最近の自分自身を振り返ると、締め切り日だけでなく、日常的に物忘れも多くなり、老化現象が加速的に進んでいるようで、このままだと「人」という分類からいつ離脱するかわからない。何事もモタモタせずに、さっさと片付けるに越したことはないと思うのだが、今更慌てても、焼け石に水だろう。「急がば回れ」という言葉もあるのだから、ここはいつものように、ウォーミングアップから始めるとしよう。

※ 日本音楽著作権協会（出）許諾第 2501866-501号

「老化現象」と言うと、老いることを否定的に捉えているように思われる。幼児のように、日に日にできることが増えていく「成長」に比べると、日に日にできなくなることが増えていくという意味においては、「老化」は否定的な現象ではある。

「老いる」ということにもちろん肯定的な側面もあるだろうが、それはともかく、七十歳を過ぎた頃のセンセイ（今道友信〔編集注〕）も、今思えば、人並みはずれた強靱な体力を誇っていらした陰で、きっと体の不具合があったに違いない。しかし、病に倒れるまで、「ヨボヨボ」という表現はセンセイには、最も似つかわしくない表現だったと思う。なんと言っても週に一度は新幹線で東京－新大阪を往復していたらしたのだから、驚きだ。

東京－新大阪間は、約二時間半の長旅である。二時間半も座席に座っていなければならない苦痛は、老化とともに大きくなる。良いお年頃になった私もようやくその苦痛がわかるようになった。毎週なんてとんでもない話だ。

……ここまで書いて、ちょっと思い出したことがある。

センセイは大型のマッサージチェアを買おうかどうしようかと、迷っていらしたことがあった。大型電気量販店にも何度か下見に行かれた。そのときの店員さんとのやりとりをここに記したいところだが、それでは本末転倒になってしまうので諦めるが、結局購入は実現しなかった。やはりセンセイも老化と闘っていらしたのは、間違いない。

さて、今日はウォーミングアップにあまり紙面を割いてはいられないので、いよいよ水原の後編に入るとしよう。

いつのことだったか、もうすっかり忘れてしまったが、私が「美しき誘い」というコラムで、水原昇を取り上げ、その洗練された作品を絶賛していた頃だったと思う。

ある日センセイがもじもじしながら「水原昇は、僕なんだよ」とおっしゃった。

……え？

今何と……　水原がセンセイ？

え？

センセイが水原？

聞き間違えたかな？

私の頭の中はたくさんの疑問符でいっぱいになって、しばし言葉を失った。センセイはもう一度おっしゃった。

「水原昇は、僕のペンネームなんだよ」。

……今度は、私の中から、絶叫のごとく「え～！」という驚嘆の声が飛び出した。

「君を欺しているようで、可哀想になってきたから」とセンセイはおっしゃった。

水原昇を褒めちぎる姿が、センセイには滑稽に見えたようで、そのような私を憐れんで、水原昇の正体を明かそうと思われたのだそうだ。

あ～あ、何たること、欺されていたとは……

あまりの衝撃のため、私の受けた痛手は大きく、回復するのに数日かかったが、「すみれ会」の存在を告白されたのもこの頃だったのかもしれない。

「すみれ会」とは主に文芸に優れた人々の秘密結社のような集まりで、数年に一度会長選挙などもあったらしい。会長選挙で争うのがセンセイと水原昇であったそうで、人気を二分していたということらしい。その会には野球を題にした歌を詠むのを得意としている楠山藤太郎も属していた。

ためらひて過ぎ去らしめしものの影
　　どよめきのうちに吸はれてゆきぬ

バッターボックスに立って、ピッチャーが投げたボールを打とうかどうしようかと迷っているうちに、見逃しの三振となり、応援していた人々から、あ～あ、とどよめきの声が上がったという様子がよく伝わってくる。

この歌をはじめて目にしたとき、センセイに、「楠山さんって、野球がお好きな、純朴な方で

すね」と感想を述べた。そのとき、「純朴かね」と少しはにかんでおっしゃったのを不思議に思ったことがあったが、そうなのだ、楠山藤太郎もセンセイのペンネームだったのだ。それを知らずにいた私……。

楠山藤太郎に限らず、センセイの分身とも知らずに褒めた歌人の数は、片手では収まらない。

水原以降は、正体を明かされてもそれほどショックを受けずに、受け止めることができた。まぁ、そこまでは許容範囲のうちであったのだ。だが水原問題はそれでは終わらなかった。

それは二〇〇七年の夏であったが、ある日『チェロを奏く象』という詩集を出すと、否、『チェロを奏く象』という詩集が出るとセンセイに告げられたのである。しかも、水原の名前ではなく、センセイの名前で出すとおっしゃったのだ。

『チェロを奏く象』，レイライン，2007年.

一瞬息をのんだ。「水原昇を抹殺する気ですか」とセンセイに訴えたような気もするが、私の心の中で叫んだだけであったような気もする。

その前後の記憶はない。どこでその話を聞いたのかも思い出せない。ただ、水原昇の存在が、この世から永遠に消し去られるような気がしてとにかく哀しかった。

……そうだ、少し後に、何と水原昇からハガキが届いたのだった。そこには、水原昇の辞世の句が記されていて、自殺をほのめかすようなハガキであった。これもあまりよく覚えていないので、現物を見てみようと思い立ち、押し入れの中を引っかき回して探してみたが、そのハガキが見当たらない。

もしかすると、「人が哀しみにくれているときに、よくもまぁこんなハガキを送りつけたものだ」と、怒りにまかせて破り捨ててしまったのかもしれない。センセイは、紳士的であるとご婦人方に人気があったが、デリカシーに欠けるところも実はあったのだ。

それはさておき、私は、この『チェロを奏く象』という詩集をセンセイから頂戴しても開くことができず、本棚の奥の目につかない場所にその詩集をしまい込んでしまった。水原昇の死を悼むあまり、読む気になれなかったのだ。センセイと顔を合わすことがあっても、この詩集の話だけはしなかった。

ひと月が過ぎ、ふた月が過ぎ、半年が過ぎ、九ヶ月が過ぎようとする頃にようやく哀しみも和らぎ、「いつまでも意地を張っていてもつまらないので、読んでやるかぁ」、とちょっと偉そうに構えて、『チェロを奏く象』を手に取った。

私の九ヶ月にわたる哀しみは、どこから来たのであろうか。詩を書いたのが、水原昇でも、今道友信でも、どちらでもいいじゃないか。

……それはそうなのだ。でも、違うのだ。

水原昇が書いた詩と、センセイが書いた詩ではわけが違う。水原には水原の人生があって、彼は、少年の頃、チェロをこよなく愛し、自分でもよく弾いていた。だが日本が敗戦を迎えたとき、彼はチェロを捨て、単身パリに渡り、世捨て人のように暮らすことになる。彼に何が起こったのかは、わからない。ただ、水原の代表的な句に次のようなものがある。

風焼に消えた青春が奏いている
チェロの低音の流れゆく河

水原は詩人なので、句を詠ませると、志賀白風や立花いとといった歌人には及ばないのだが、センセイはこの句を好んでいた。

「これは私の最も好きな幾首かの現代短歌の一つである。第二次大戦の空襲で焼け失せた後、数日の美しい風焼の夕景色は荒れ野と化した東

京をさらに惨めに見せながら、しかし人びとに呆然となる時間を恵んでいた。その火の中に詩人の青春の計画も作品もすべて消え失せてしまった〔雑誌『ムネーモシュネー』第六号所収「貧しい贈り物」より〕とセンセイは水原を憐れむ。水原は、パリのセーヌ河を眺めながら、かつて愛したチェロの響きを遠い思い出とともに聴いていたのであろう。

このような繊細な詩が、センセイの詩とは到底思えない。これは誰が何と言おうと、水原昇の作品なのである。

……とまぁ、私はこう言い続けているわけなのだ。

水原の辞世の句を探していたとき、思いがけず、水原の未発表の原稿『老いの春』が出てきた。これは、三十分ほどの短時間にセンセイが、否、水原が書き上げたものだ。

ある春の昼時に、私がセンセイのご自宅近所のコンビニでおみやげ代わりにおにぎりを買って伺ったときのことである。もちろん、それまでにセンセイはコンビニのおにぎりを召し上がったことはあったが、うまく封を開けられないとおっしゃっていた。

フィルムシールに記載されている数字の順にはがしていけば、パリパリの海苔で包まれたおにぎりが出てきますよ、と実演してみせると、センセイはいたく感動され「これは高等数学できているね」とおっしゃったことがあった。

その後、どうやらセンセイは、久しぶりに訪ねてきた水原にコンビニのおにぎりの食べ方を教えてあげたようで、庭に咲くセンセイご自慢の桜が風にゆれ、はらはらと花びらを散らす様子を眺めながら、二人でおにぎりを食べていたようだ。その光景を詠ったのが、次の詩である。

老いの春

「言葉も年をとるね」
〔花はらり〕
「体ばかりではないね」
〔花はらり〕
「ろうそんも悪くないな　この握りめし」
「高等数学だよ　これは」
〔花はらり〕
〔中略〕
「言葉は年とっても　出てくりゃいいね」
〔花はらり〕
「うむ、杖ついてでも出てくればいい」
〔花はらり〕
「いつも今年きりの花かと思うよ」
〔花はらり〕
「考えないことにしてるんだ　そういうことは」
〔花はらり〕
「考えたって仕方ないものな」
〔花はらり〕
「というよりも　ほかに考えることもあるし」
「自分のことをほったらかしてもか　君が――」
〔花はらり〕
「いや、何ていってよいか――
年取った言葉で考えてみたいのだよ」
〔花はらり〕
「ちがう世界が見えてくるかな」
〔花はらり〕
「世界っていうよりも　何か別のものだ」
〔二人とも花の枝を仰ぐ〕

老齢に達した二人が、椅子にすわり、コンビニのおにぎりを食べながら、庭の桜を眺めている姿を想像してみよう。

時が静かに流れる中、二人の会話が弾んでいるわけではなく、ぽつりぽつりと言葉が交わされる。そこでは、多くの言葉は必要ない。もちろんこの詩は、水原の想像の中で生まれた詩であり、センセイの想像の中で生まれた詩でもある。モノローグであり、ダイアローグなのである。

水原昇とは何者なのか。水原は、センセイの影ではない。彼は、センセイの友として確かに存在していたのだ。

価値の心理学

ニューヨーク市立大学准教授
今道友昭

「本当の」価値も個人や社会の思い込み、幻想かもしれない、といった心理学的観点から考えていきたい。

物の価値は変動する。その価値を変動させるのは広告、マーケティング、インフルエンサー。心理学実験でも明らかにされている。

最初は大した価値のないものが価値があるように見えてくる。

ソーシャルメディアである動画を見るを選択するときに、似たようなクリックベイトが並んでいれば、視聴回数が多いに方に誘惑される。

人が沢山並んでいる店には並びたくなる。特に日本人は並ぶのが好きだと言われている。

「なんで並んでいるのですか?」

「みんなが並んでいるから」

そして長く並んで高いお金を払ったからその店の商品やサービスにそれなりの価値があると思いたくなる。少なくても自分が無駄なお金、時間、努力を掛けた、間違った選択をしたと思いたくない。その店の評価は多くの星レーティングや好評価なコメントに後押しされる。

皆がそうするのなら、それはそれなりの価値があるのだろうと無意識に思ってしまう。自分自身の判断に委ねるよりも周りを信じてしまう。

周りの影響力には情報的影響（Informational Influence）周りの判断は正しいだろう、自分も正しい判断をしたい、と規範的影響（Normative Influence）（たとえ間違っていたとしても）周りと同じことをやるとによって一体感を味わえる、あるいは疎外感を避けられる心理的ニーズが満たされる。

バーゲンセールの戦略はまず「バーゲンセール」と掲げること。前提は価値のあるものを安く買えることによって得ができると思い込ませる。そして赤い大きい標識がディスカウントを示すとさらに効果的。期間限定、残りあとわずか！　と聞くと貴重価値も上がる。

そしてより効果的なのは他人が目の前で買って行くこと。アメリカでは感謝祭の後に一一月の末ブラックフライデー（Black Friday）に巨大セールが行われる。ブラックは黒、黒字のことを指す。場合によっては、その年度の一番の経済効果が見込まれる金曜日。普段の値段からのかなりの割引で物が買える。かなりの割引にもかかわらず企業が大儲けできるのを考えると、いかに普段の値段が上乗せさせられているのが分かる。クリスマスプレゼントを購入する時期でもある。

資本主義・消費社会の価値観を代表するようにクリスマスの中心になるのはプレンゼント。

そしてそのプレゼントは多くの場合は「物」で表現される。「物」といっても自分で作ったものではなく、買ったものである。そしてそのものを手に入れるためには、他人を押しのけて、踏み付けて、喧嘩（けんか）して、人殺しをするまでに至るのがアメリカのニュースで報道されたこともある。

元々はキリストの誕生を祝い、人のために良いことをするつもりがこのざまである。物と人（人の命）の価値が問われる。

多くの物の価値は一時的である。資本主義・消費社会の基礎は、人々は常に消費をしていくのが前提である。物に対して粗末な扱いをすることによって人に対しても粗末な扱いにつながると『愛について』で今道友信が論じている。物に対しての粗末な扱いは環境問題にもつながる。

資本主義・消費社会は同じようなものを何回も買わせる。それを可能にするのは計画的陳腐化（Planned Obsolescence）と認識された陳腐化（Perceived Obsolescence）。

計画的陳腐化によりものは壊れるように作られる、またはメインテナンスや修理、アップグレードが困難または不可能な作りでやむを得なく買い換えることになる。

認識された陳腐化は物がもう時代遅れや古臭く感じられることで、最先端をいきたい欲望や取り残され、仲間外れになる恐怖感から新しいものを欲しがることが買い替えを促す。

自分の価値は持ち物の価値が表している、または、周りが自分の持ち物によって評価してしまうと思ってしまう。

一昔前まで格好良い・可愛いとされた価値にあるものが、いつのまにかダサイ、価値のないものに変身してしまう。本来は賞味期限を過ぎた、有効期間が切れた、使用済みが、関係ないはずの商品もその対象になる。

流行品はちょっと変わっている、新鮮味や面白味がある分だけ、時が経つことによって、飽きてしまう。

ある程度の人が参加しない限り流行にはならいないが、一部の限られた人から始まったことが大衆化してしまうと、新鮮味と面白味がなくなり、価値が下がる。すなわち、他人に惑わせられる。

しかし人は必ずしも他人に惑わせられる訳ではない。しっかり自分で評価するものもある。

それは自己評価。

自己評価といえば、一般的に自分の発想、発言、作品が価値のあるものだと思い込む。その傾向はどちらかといえば、アメリカや個人主義（Individualism）が強い社会環境の方がありがち。

アンケート調査では自分と他人を比較するとほとんどの場合、自分を他人よりも評価する傾向がある。

もし皆が自分を客観的に評価するのなら自己評価の平均は平均（真ん中ぐらい）であるはずだが、結果的にはその平均は平均以上（真ん中より上）になる。全体的に主観的評価が客観的評価を上回る傾向がある。レイク・ウオビゴン効果（Lake Wobegon Effect）としても知られている。その現象は利己的偏見（Self-serving bias）の一部としても知られている。

もちろん現実的な自己評価をする人もいる。ただしその様な人は鬱病の傾向があるとみなされている。

しかし利己的偏見は自分個人に当てはまるだけではなく、自分が所属している集団・社会に

今道友昭（いまみち・ともあき）

ニューヨーク市立大学のラガーディア・コミュニティ・カレッジと大学院の心理学准教授．ニューヨーク市立大学大学院で環境心理学の博士号を取得．批判心理学，環境と健康と社会正義と持続可能性の関わり，日常生活環境の現象学的アプローチと存在様式などが興味分野．ニューヨークマラソンを２時間58分で完走．

https://lagcc-cuny.digication.com/tomo_ imamichi/Welcome/

も当てはまる。自分達は凄いのだ、特別だ！

そのような過剰評価・例外主義が残念な結果をもたらした事例も多い。一つの例はホロコーストである。

本来ならホロコーストの教訓は「このような残虐なことを二度と繰り返してはならない」である。具体的には、人間の尊厳を守る「人間の尊厳は侵すことのできないものである（Die Würde des Menschen ist unantastbar）」は戦後ドイツの憲法一条に刻まれている。

しかし、二度と繰り返してはならないことが違う形で繰り返されている。過去の罪悪感からユダヤ人を守るには、イスラエル政府とザイオニズム※（Zionism）に全て賛同しなければならないと思い込んでいる、ドイツ政府は新たな虐殺に賛同している。資金と武器を国政法と人権を無視して暴走しているイスラエル政府に供給し続けている。

国として「人間の尊厳」を守るはずだったのに、パレスチナ人を無視している。皮肉なことにドイツでは、パレスチナの人権尊重を主張する人々は（中にはユダヤ人、ホロコーストを体験した人も含み）犯罪人扱いされる。

そして「それは、間違っている！」と思っても、それを言えない雰囲気が作られてしまっている。

健全な社会では、間違わないことよりも、間違っていると思ったことに対して「それは、間違っている！」と言えて、議論の場を設け、改善していけるのが戦後教育の一環であるはずだった。価値観が変動することと歴史は違う形で繰り返す一つの例でもある。

最後にいかに価値が変動するのかは論文の具体例が浮かぶ。書くからには多少の価値があることの前提で書く。夜一人で書いているときには良い論文だと思えても、次の朝起きてみたら違うように見えてくることもある。しかもそれを人前で発表する、出版される価値があるのだろうかと急に不安がよぎることもある。

（いまみち・ともあき　環境心理学）

※**シオニズム**　ユダヤ系の民族文化ナショナリズム運動であり、パレスチナ地域でイスラエル国家をユダヤ国家として設立し、発展させるイデオロギーである（今では一部のユダヤ人からも入植者植民地民族、アパルトヘイト国家の要素で批判されている）。

PVLCHRITVDO SPLENDOR

第14回

美は輝きだ

ブルクリトゥードー　スプレンドル

価値——それがどうした！

編集隊長　濵賢

哲学史上、といわず日常生活でも重要な価値、ということで今回取り上げた。価値があろうとなかろうと、好きなものは好き、そうでないものはそうでない。旧態依然の教養書を読めば、古典、名著にはたいてい恐るべき価値があるかのように、それゆえに研究せねばならぬと言わんばかりの使命感を装った激しい権幕だが、絶対的無前提性にあぐらをかいた価値在り信仰でしかないような気がしなくもない。自分が好きな研究対象こそが最も優れた価値ある的な。要するに疑いようのないまぶし過ぎる価値が輝いているから、プラトンを研究するのではなく、思想や作品に魅力を感じるから研究する（読む）のがスジで、価値の有無ではなく、詰まるところ、好みでしかない。好きだから読んでいると言わずに、永遠の絶対的価値があるから読まねばならぬ的な詭弁（きべん）は謹んでいただきたい。好み＝その人にとっての価値は客観性、普遍性、換金性とは無縁なので、伝統的な価値（真、美、善、仁、愛）とは別物だとは思うが、よく分からない。どなたか手短にご教示いただければ幸いである。

■フィロカル 第14号（2025年春）
■発行所　哲学文化塾（今道友信記念文庫）
■企画編集　ピナケス出版有限会社
■制作協力　ムネーモシュネーの会
大異山高徳院清浄泉寺
日美学園日本美容専門学校
■編集隊長　濵賢（hamacken）
■ @philocultures
OMNIA VINCIMVS FRVCTV INTER FOLIVM VERO!

次号『フィロカル』は 2025年 7月頃発行予定.

フィロカル　第一四号　二〇二五年四月一五日発行　発行所　哲学文化塾（今道友信記念文庫）　企画編集　ピナケス出版有限会社　〒一〇六-〇〇四七　東京都港区南麻布一-三-二六-五〇一　www.pinakes.jp　印刷　東京カラー印刷株式会社

美について考えるために

今道友信記念文庫 編

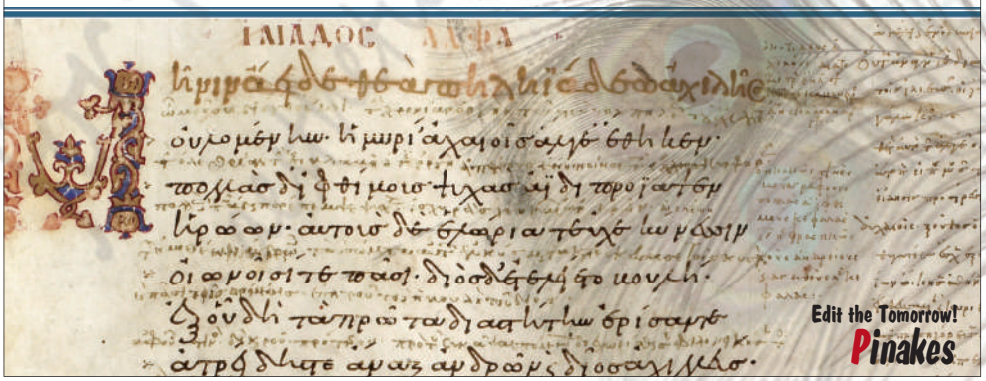
日本図書館協会選定図書

⊙新版 美について考えるために 2024年発行
⊙四六判・ 並製・282頁・タテ組
⊙定価：本体1,800円+税
⊙ISBN978-4-903505-21-3　C0070

■著者略歴　今道友信（1922 - 2012）．哲学者・美学研究者．東京大学名誉教授，日本アスペン研究所特別顧問，日本美容専門学校名誉校長．国際美学会副会長などを歴任．シェルティエ賞，紫綬褒章，勲三等旭日中綬章，第25回マルコ・ポーロ賞，第19回和辻哲郎文化賞受賞．

■主　著　『美について』（講談社現代新書）．『エコエティカ――生圏倫理学入門』（講談社学術文庫）．『美の存立と生成』（ピナケス出版）．『同一性の自己塑性』（東京大学出版会）．『中世の哲学』（岩波書店）．『今道友信　わが哲学を語る』（かまくら春秋社）．『未来を創る倫理学エコエティカ』（昭和堂）．『音楽のカロノロジー』（日美学園／ピナケス出版）．

■編　著　『講座美学』（東京大学出版会）．『新しい倫理　エコエティカをめざして』（哲学美学比較研究国際センター），ほか多数．

美しさとは輝きである

カロノロジー，実践美学が創造的 21 世紀を築く，
美しく生き抜くための実践的・知的ヒントがここに！